

# 予防～看取りまで生活を診るために 多職種協働と地域連携に力を入れる

医療法人社団裕和会長尾クリニックは、人口10万人あたりの診療所数104.52(全国平均71.57)<sup>\*</sup>という激戦区にあって長年、地域のかかりつけ医として支持されてきました。その背景には患者が必要な医療を適宜受けられるためのインフラ整備と地域連携の充実があります。長尾和宏院長に、かかりつけ医として実践している取り組みを聞きました。

※ 日本医師会地域医療情報システム

## 医療資源が豊富な地域では それを統合する存在が重要

医療法人社団裕和会長尾クリニックは、1995年、古くは阪神工業地帯の中心として、近年は公共交通機関で大阪と神戸に20分以内でアクセスできる利便性から、子育て世代の人気を集める兵庫県尼崎市で開業しました。現在は365日年中無休の外来診療のほか、在宅療養支援診療所として訪問診療や看取りも実施。さらに健診などを行う予防医療センターを併設し、身近なかかりつけ医として予防から在宅療養まで担っています。

この取り組みについて、長尾和宏院長は「尼崎市は医療資源に恵まれているため、複数の病医院、専門医を受診されている患者さんが多く、これが多剤投与につながっています。多様な選択肢がある地域だからこそ、それらを統合するかかりつけ医の重要性は高いと考えています」と説明します。

かかりつけ医機能を発揮するために同院では、①必要なインフラの整備とスタッフの充実、②院内外との連携体制の構築に力を入れています。

消化器内視鏡やマンモグラフィ、16列マルチスライスCTなどの検査機器に加え、さまざまな専門性を持つ常勤医6人と非常勤医約10人体制で、迅速かつ的確な診断と治療を実践。さらに女性外来やもの忘れ外来などの専門外来に加え、約400人の在宅患者の訪問診療も行っています。また、管理栄養士5人体制での外来・訪問栄養指導、5人の理学療法士による院内外でのリハビリにも力を入れています。これらインフラ整備の目的は



啓発活動の一環として毎年、地域住民を巻き込みながら市民フォーラムを行っている

「患者の生活を診る」医療の実践です。「生活を診るためには食支援やリハビリが欠かせません。地域医療において、管理栄養士やセラピストの果たす役割は大きく、かかりつけ医には直接雇用するか、連携する必要があります」と長尾院長は話します。

## かかりつけ医機能の発揮に 連携専門スタッフは不可欠

「地域医療連携なくしてかかりつけ医は成り立ちません」と断言する長尾院長は2003年に「在宅医療ステーション」を開設し、訪問看護、訪問リハビリに加えて、地域連携部に6人の専従スタッフを配置し、患者や家族の相談対応はもとより、病院や介護事業所との連携の調整などを行っています。

「地域医療連携ができないかかりつけ医は信用されません。もはや地域連携専門のスタッフは診療所にも必須と言えます。当院では1日20通を超える紹介状のやりとりがあり、スタッフ数は倍増したいというのが本音です」と長尾院長は話す。

また、「尼崎在宅医療の病診連携を考える会」(診療所と病院)、「尼崎多職種連携の会」(診療所と医



地域医療連携を充実させるため、専門のスタッフを配置している

療・介護関係者)、「阪神ホームホスピスを考える会」(在宅ホスピスにかかわる開業医同士)など、さまざまな会を立ち上げ、地域連携を推進しています。さらに08年にはボランティア団体「在宅ケアネット尼崎」を発足させ、地域住民の企画・運営による市民フォーラムを毎年行うなど、啓発活動を通じて、住み慣れた自宅で自分らしい最期を迎えることができる地域づくりにも取り組んでいます。

「医療の主演は患者さんです。その人たちを置き去りにしては、地域医療とは言えません。地域住民の意識を高め、巻き込むこともかかりつけ医の使命だと考えています」と長尾院長は強調します。

## アナログとデジタルを活用した 情報共有で意思統一を図る

かかりつけ医機能の発揮に向けて地域連携と同様に院内連携の強化にも取り組んでいます。同院では365日体制の外来や訪問診療、緩和ケア、看取り、予防領域までカバーしているため、在籍する職種は10以上で、スタッフ数は非常勤を含めて100人を超えます。

「かかりつけ医機能」を担う一員としての意識を統一するため、事務長・副事務長、各部門長たちと行う毎日のリーダー会議で幹部の意思統一を図り、それを現場に落とし込むとともに、週3回昼休みに全体ミーティングを開催し、長尾院長自らの声で繰り返し訴えます。さらにミーティングは動画で撮影し、当日参加できなかったスタッフもネットを使って情報共有できるようにしています。



長尾和宏氏

長尾クリニック院長

「病院勤務経験のある専門職の多くは、病院と診療所の医療の違いを理解していません。診療所では病院以上に専門分野の枠を超えた臨機応変な対応が必要であり、これを浸透させるには繰り返し説き続けるほかありません。当院の考えるかかりつけ医療について理解してもらうために、ご家族の許可をとり、外来や在宅医療でのやり取りを撮影し、それを全員で確認することもしています。人数が増えるとうちでも断片的な情報しか共有できなくなるので、動画やメーリングリストなどICTの活用も重要になります」と長尾院長は語ります。診療方針の統一と医療の標準化を図るため、毎月夜間に医局会を開き、生活習慣病の治療や緩和ケアの進め方、食事療法の適用基準など、徹底的に議論しながらすり合わせを行っています。

24時間365日体制と聞くと、スタッフの負担が気になりますが、同院では余裕を持った人員体制を敷き、夜間の緊急連絡のファーストコールはすべて長尾院長が受けることで軽減しています。

「地域の幅広い相談に対応するのがかかりつけ医の仕事だと考えています。そのためには多様なニーズに応えられるスタッフ、さらに相手の訴えをきちんと聞く時間をとるための余裕を持った診療体制が不可欠。少数精鋭で多くの患者さんを診ると儲かるかもしれませんが、それでは医療者と患者さんが納得する医療は提供できませんし、信頼感を損なうと地域やスタッフからも愛想をつかされてしまいますから」

## 医療法人社団裕和会長尾クリニック

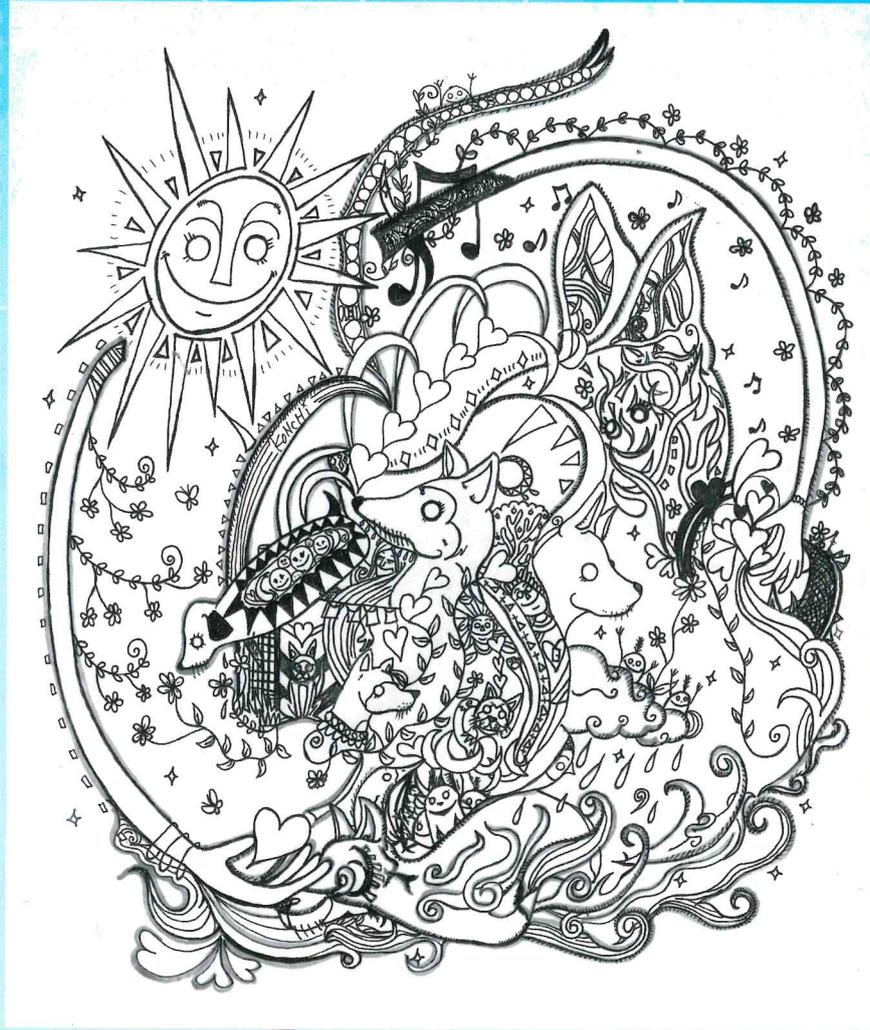
診療科：内科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、  
整形外科、リウマチ科、放射線科  
住所：〒660-0881 兵庫県尼崎市昭和通7丁目242番地  
電話：06-6412-9090

URL：<http://www.nagaoclinic.or.jp/>

# MIPG 医療情報レポート

vol.128

## 実践事例から考える これからのかかりつけ医の機能と役割



 **Paralym Art**  
障がい者アートを応援しています  
～今号の1枚～  
作品名:「3」  
作者名:Konchi.tさん